

海風



絵・剣持晶子

しめのゆめ

岩のうえから海面をのぞきこむ。去年、飛びこもうとしたときには七、八メートルだときいたのに。絶対去年より高くなってるだろ。こんなところから、飛べるわけがない。

「おーい……」

と、飛びこみ岩から少し離れた海面から、ほしのよちへい星野洋平をよぶ声がしている。やべえ、無理。ぜってえ、無理。

太陽にじりじりと背中をやかれる。汗がぼたり、ぼたりと、岩にしたたりおちて、ジジッと音をたてた。

*

東京近郊のこの街に、洋平が引越してきたのは、中学二年になった四月。いまは七月だ。慣れないな、と思う。

ここは、海辺の町じゃない。鳴りやむことのない波の音が、きこえない。潮のにおいも、しない。なにより、海に

抱かれて眠る感覚がない。

洋平がいたのは、海の家がひとつしかない、白砂の海水浴場。近海での漁をする船が、何艘か泊まるだけの漁港。

たったそれだけの、小さな町だ。

いまなら、午前の授業をぶちぬいて、遠泳してるんだろうな。あたりまえのように泳いで、あたりまえのように海風の音をきいているはずだ、と思う。

風はどこにでもふくのに、海の風と都会の風は、音までちがう。

「まあ、転校生なんて、そんなもんさ」

いつのまにかなかよくなった、かしわはらなむと柏原直人が言う。

「そんなもんって、なんだよ」

洋平は、風の音がちがう、と言っただけだ。